

## IPEX2014

世界の4大印刷展示会の一つであるIPEX2014が3月24日(月)から29日(土)の6日間にわたり開催された。前回のIPEX2010まではバーミンガムで開催されていたが、今回からはロンドンの展示会場ExCelで開催されることになった。

展示会の規模としてはハイデルベルグ、KBA、マン・ローランド、リョービMHIなどの印刷機大手や、HP、コダック、キャノン、リコーなどのデジタル印刷機大手が出展を見合わせたこともあり前回と比べて出展者数が約1000社から400社、展示面積が5万㎡から1.5万㎡、来場者数が5万人から2.3万人とほぼ半減の状態となった。ただ規模は大幅に縮小したものの、各出展者はそれなりの受注実績を上げているようで、展示されている大型の機械に納入先の名前が掲げられているものが数多く見受けられ、展示会としては成功を収めていた。また来場者の内訳としては英国が54%、海外が46%と、国際展示会としての地位は維持している。

IPEX2014での最大規模の出展者はコニカミノルタで、そのほか富士フイルム、MGI、小森、Intelligent Finishing Systems (ホリゾンなどの後加工機の代理店)、Hans Gronhi (シノハラの親会社)、大日本スクリーン、Morgana Systems (製本機械メーカー)などが大きなブースを出展していた。これらの企業の出展により、一部大手の参加見送りにもかかわらずオフセット、デジタル印刷、フィニッシング加工、製本など一連の最新技術の動向を見ることはでき、展示会としての価値が損なわれることはなかった。

IPEXではWorld Print Summitとして期間中に20もの講演やパネルディスカッションが行われたほか、Master Classと呼ばれる少人数でのセッションが52コース開催された。さらに25日―27日の3日間はCross Media Productionというクロスメディア分野に絞った展示会も同時開催され、ここでも50以上のセッションがデジタル・ダイレクトマーケティング、ブランドマネージメント及び出版の3つのカテゴリーに分かれて同時開催された。シカゴのPrint13でも数多くのセミナーが開催されていたが、全て有料でセッションも90分であったのに対し、IPEXでは45分と短いものの全てが無料という点がPrintとは異なってい

た。なかなか有料にすると人を集められない実態が垣間見られるが、やはり印刷産業がモノ作りから、サービスやビジネスモデル中心の産業に変化しているなかで、単に機械を見て回るだけでなくこのようなセミナーから情報を得ることが重要となってきている。

展示会場を見て回ると中国の機械メーカーやCTP機材メーカーが何社も出展しているほか、パネル展示ではあるがインドの輪転機メーカーが3社も出展していたり、中古機械販売会社が20―30社も出展しているのが目についた。中古機械販売会社ではあってもかなり立派なブースを持っていたり、実際の機械を展示したりとかなり力を入れた出展をしている。これはIPEXの来場者の46%が海外からということで、英国や欧州市場以外からの顧客も見込めることから、これらの出展がされている。ただ、今まで活発であった新興国市場での動きが最近悪くなってきているという。

Print、IPEX、IGASとdrupa以外は規模がコンパクトになってきているが、これは印刷産業が大量生産のモノ作りから、より付加価値の高いサービス志向の産業へとシフトしていく一つの変化の表れなのかもしれない。大きなブース、派手な演出などが影をひそめる一方、セミナーなどを通じて色々なビジネスのあり方を学ぶ場に変化してきているように思われる。



ベニー・ランダ氏の講演



会場入り口